

小山先生と思い出のお茶

遠藤 啓之

「先生お疲れ様です。お茶をどうぞ。」

修士論文審査、入試面接、先生とご一緒させていただく際は、常に小山先生からペットボトルのお茶をご馳走になった。いつも気にかけてくださり、笑顔で迎えていただいた。

小山先生とは、研究室が隣同士で、学内に立ち寄る際は常に先生の研究室の前を通過して自室に入ることになる。小山先生の研究室は、雑誌や書籍が大量に運び込まれており、段ボール箱もたくさん置かれていた。当職は、というと、段ボール箱がいくつかあり、中身は、自分の書いた紀要で配布し損ねているものや季節性の備品である。

小山先生が研究室にいらっしゃるときはいつも本を読み、研究されていらっしゃった。

ある時、お忙しいことを承知で小山先生にバランスシートの見方をお尋ねした。素人がバランスシートを見るにはどのようなところをどのように見るのが良いかお尋ねした次第である。

小山先生は手を止めて、「先生、バランスシートは右下の資本の部が厚いのが良いのです。その部分がずっしりとしていると重心が下にあり良い会社とみています。」と教えてください

った。

もう少し詳細に伺ったと思うが、要点として今でもよく覚えている。

年賀状のやり取りもしており、小山先生から毎年年賀状を頂いた。

修士論文審査の際には、小山先生の丹念な質疑応答を見させていただき、また、入試面接の際も優しい対応で受験生の緊張をほぐしていらっしゃった。

小山先生とまたご一緒させていただきたいと思っていたが、訃報を聞き、とても寂しい思いをした。

コロナ過となり、学生だけではなく、教員にとっても交流の場が失われてしまった。修士論文や入試面接の際にあるいは学内の委員会の際にズームで顔を合わせる程度になってしまった。直接お会いした際にいつも気にかけてくださった小山先生のやさしさが忘れられない。

頂いたお茶にのどの渇きを癒された思い出が小山先生との一番の思い出である。